

文法変化と意味記述——対人化と推意——

小柳智一（聖心女子大学）

ある内容語 X が機能語 Y になる変化を「機能語化」と呼び、ある機能語 Y₁ が別の機能的意味 Y₂ を表すになる変化を「多機能化」と呼ぶ。これは、「文法化」研究の言う「第一次文法化(primary grammaticalization)」と「第二次文法化(secondary grammaticalization)」の区別に相当する。本発表では、日本語文法史を対象として、特に多機能化を取り上げ、そこに見られる顕著な一般的傾向について考察する。それは、聞き手に向けた意味に変化する「対人化」（「間主観化」と呼ばれることがあるが、この用語は適当でない）という意味変化である。ただし、これは傾向であって法則ではなく、例外となる事例もある。その事実も押さえた上で、なぜこのような一般的な傾向が見られるのか、その理由について考える。また、対人化に限らず、文法的な意味変化が、ある形式の意味記述に影響を与える場合（例えば、多義化する場合）について考察する。これにはスキーマの形成や家族的類似の形成という問題が関わり、さらには言語史にとって深刻な認識論的問いにつながる。それがどのような問いであるかを明らかにし、その解決に取り組む。